主に葉に発生する病害

①黒とう病

常発園地では展葉直後から葉に病斑が認められる。病斑上に形成された胞子が雨滴によって周囲に飛散し、各部位に感染する。新梢にも発病し、激しい場合は新梢全体に多数の病斑が形成され枯死に至る。花穂や果房、巻きひげにも感染・発病する。

②べと病

７月中旬以降に葉や幼果で確認。病斑の葉裏には白いかびが密生、雨や水滴により周囲に遊走子が分散し発生が拡大し、激発すると早期に落葉する。感染した幼果は表面に白いかびを生じ、果粒は青鉛色に変色、硬くなる。脱粒する事も多い。

本資料は道総研農研本部に無断で転載･改変する事はできません。

③さび病

　葉に黄斑を生じ、葉裏にはオレンジ～黄色の粉状の胞子が形成される。発生は稀である。

本資料は道総研農研本部に無断で転載・改変する事はできません。